

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます。)

「前書き」

「ぼく(健太)」「大介」「夏葉」「敬一」は、小学六年生で、同級生である。「大介」は、学校帰りに寄り道をして、家下川で魚釣りなどをして遊んでいる。「ぼく」は、「大介」に引きずりこまれるように一緒に遊ぶようになり、「夏葉」も仲間に加わった。そんなある日、「敬一」が、学校代表として市の文化会館で研究発表をすることとなり、その予行演習を五、六年生全員が聞くことになった。

*

『これが、ウシモツゴに卵を産ませたぼくの水槽です。ウシモツゴは、石に卵を産みつけるので、石のかわりに、植木鉢を半分に分けたものを入れました。こうすることで、植木鉢はウシモツゴのかくれ家にもなります。また、臆病なウシモツゴのために、水槽のまわりは黒い板でかこうことにしました』

「でかい水槽だなあ」

「こんなに、本格的に魚を飼うなんて、大人みたいだ」

ぼくたちは、スクリーンに映る写真を見ながら、敬一の話にどんどん引きこまれていった。産みつけられた卵の写真、生まれたばかりの稚魚、その稚魚が育つようす。だれもが、スクリーンにくぎづけだった。

『ただし、こうやって生まれた稚魚も、今、学校のまわりにある川では育つことはできません。それは、水がきたないからです。つづいて、この表を見てください。これは、学校のまわりの川の水質を調べたものです。矢作川、家下川、新川、

中川の、pHとCODをそれぞれ調べました』

「なに？　ピーエイチって」

「わかんない」

「CODって？」

「だから、知らないよ」

『pHは、水が酸性かアルカリ性を調べるための、CODは、化学的酸素要求量、つまり、水のよさを調べるものです……』

なんだか、難しい話になってきた。ここから先は、さっぱり理解できなかったが、ぼくなりにはわかったことがひとつある。それは、同じ川を相手にしても、敬一^①のやっていることはまぎれもない研究で、^Aぼくたちのやっていることは能天気な遊びだということだ。

『以上の結果からわかったことは、矢作川はきれいで魚のすめる川ですが、家下川、新川、中川は、とても水がよごれていて、魚のすめない川だということです』

（ちよつと待て、魚はいるぞ！）

『ぼくたちは、害のない石けんを使ったり、ごみを捨てない努力をして、町の中を流れる家下川、新川、中川をきれいにしなくてはなりません』

（おい、家下川には、魚はいるぞ！）

『小さな努力が、やがて川をきれいにし、地球を美しい星にするのだと思います。みなさん、魚が一匹^{びき}でもすめる川にす

るため、みんなで協力しあいましょう』

（敬一！　家下川には、魚がいっぱいいるんだぞ！）

パチ、パチ、パチ、パチ。

パチ、パチ、パチ、パチ。

心の中でいくらさけんでも、ぼくの声は伝わらず、みんなのように拍手^{はくしゅ}する気にはなれなかった。ふと見ると、大介は下をむいて考えこんでおり、夏葉はくやしそうに舞台^{ぶたい}をにらみつけていた。

「夏葉……」

「……」

こんなふうに、ひとをにらみつける夏葉を見たのは、これが初めてだった。

帰りの会が終わると、ぼくは、学校の裏庭にむかった。夏葉に「話があるの」と、よびだされたからだ。おそらく、敬一の研究発表のことだと思う。大介は用事があるらしく、少し遅^{おく}れてくるといった。

校舎をまわり裏庭につくと、夏葉が鳥小屋の前に立っていた。

「大介くんは？」

「後からくるって」

^Bぼくたちは、なんとなく鳥小屋をながめた。しばらくして、夏葉がいった。

「どう思った？　敬一くんの発表」

「うん。正直いって、腹がたった。家下川に魚が一匹もすめないなんて、よくいうよな」

「でしよう、わたしも同じ」

「へへっ、すごい顔してにらんでいたもんな」

「そう？」

夏葉は、そういって、セキセイインコのとまっている枝を見上げた。

「だけど、おれ、ちよつとびっくりしたな。敬一みたいに、魚を飼ったり、水質検査したりなんて、考えたこともなかったから」

ぼくが、そういうと、夏葉はくすくすと笑った。

「なにがおかしいんだよ」

「だって、あなるわよ。わたしが、川を調べなさいっていわれたら、たぶん、あれと同じ水質検査をしたと思うわ。インターネットで調べれば、検査のやり方からグラフの作り方まで、かんたんにわかるからねっ」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんだよ」

（さすが、なんでも知ってるんだな）と、思った。

「でも、ウシモツゴを実際に飼って、観察してるんだぜ」

「それは認めるけどね。だけど、あのやり方もネットに出てたよ。前さ、敬一くんがウシモツゴを飼っているっていうから、

どんな魚かなって思ってた調べたことがあるの。そしたら、あれと同じ飼い方がのってた。それに、敬一くんのお父さん、熱

帯魚を飼うのが趣味なんだって。だから、水槽も、ろ過槽も、ぜんぶそろっていたわけよ。それに、敬一くんち、お父さんもお母さんも親ばかだから、どこまで自分でやったことやら……。あつ、やだ。わたし、悪口いってる」

「き、気にすることないよ。敬一が、あんなこといえば悪口のひとつもいいたくなるよ」

夏葉は、鳥小屋の金網^{かなあみ}をがっしりつかみ、大きく、うん、と頭をふった。

「わたしね、このごろ、おかしいの……。前にもいったでしょ。みんなにあわせて演技をしてるって、いい子のふりをしてるって……。今までは演技していても、それが本当に自分だと思っていたし、このままでいいと思っていた。でもね、なんだかこのごろイライラして、もうこんな自分が嫌^{いや}で嫌^{いや}でたまらなくなるときがあるの。全部ぶっこわして、リセットしたい気分……」

夏葉のよこ顔が、泣き顔に見えた。一粒の涙^{なみだ}も流していないし、口もとは笑っている。でも、その目は悲しげで、ぼくは、なぐさめてやりたい気持ちでいっぱいになった。

「いいじゃん。どんな夏葉でも、おまえはおまえだよ」

「え？」

「おれだって、そう思うときがある……」

「……」

ぼくは、夏葉に、そんな言葉しか、かけられなかった。でも、それは、正直な気持ちだった。

みんなの前で、いい子を演じてきたという夏葉と、みんなと同じであることを演じてきたぼく。ぼくは、優等生ではないけれど、夏葉の気持ちがわかる気がした。

「おれはね、大ちゃんと遊んでいてわかったんだ」

「なにを？」

「楽しいものは楽しい。おもしろいものはおもしろい。そういう、あたりまえのことを、全部、自分できめようって。それから、ひとの目を気にしないってこと」

「ふーん。でも、わたしには、やっぱり無理そうだな」

「おれだって、無理。そう、かんたんそうなことなのに、すつごくむずかしい。でもさ、大ちゃんを見ていると、すつごく自然なんだよ。あいつは全然、そんなつもりじゃないだろうけど」

「そっかあ……」

「あいつの前で、かっこつけてるとき、ばからしくなっちゃうよ。それに、あの能天気な調子につられて、なんでもできそうない感じがしてきちゃうよな」

「うん、そうよね。わかる、わかる」

夏葉はそういうと、背筋をのばして、おどるようにくるりとまわった。

「あーあ、いろいろ話をしたら、なんか、さっぱりしちゃった。あつ、大介くんだ！」

振りかえると、大介が、ランドセルをゆらしながら走ってきた。

「ごめん、ごめん。遅くなっちゃって」

「こら、罰金だぞー」

夏葉は、さっきまでとは別人のような、⑦ 顔でそういった。大介は、へへっと笑い、夏葉にいった。

「ところで、話って、なんだったの？」

「ダメ、遅かったから、教えてあげない」

「意地悪いわないでよ」

「ふふつ、じつはね、敬一くんが家下川に魚がすめないっていうから、腹がたっちゃってさ、悪口がいたかったの。でもさ、健太くんに聞いてもらったら、すっきりしちゃった」

「そうなの？ 健ちゃん」

⑧ ぼくも、つとめて明るくふるまった。

「本当だよ。夏葉のやつ、怒ると怖いんだぜ。敬一を家下川に連れてって、橋の上からつきおとすっていうんだ」

「そんなこといってないわよ」

「いった、いった」

ふざけあうぼくたちに、大介が真顔でいった。

⑨ 「ぼくも、それがいいと思う」

「えっ？」

温厚な大介の言葉とは思えない。ぼくと夏葉は、顔を見あわせた。

「ただね、橋の上から落とすつてのは、ちよつと……。だけど、敬一くんを川に連れていこうよ」

「はあ？」

予想外の展開だった。

⑩

「なんでだよ」

「敬一くん、川のことをよく知ってるから」

「大介くんのほうが、よく知ってるでしょ？」

「そうだよ、敬一なんか、本やパソコンで調べたことばかりだ。本当のことはなにも知らない」^⑪

「でも、ぼくは、本にのっていることを知らないよ。魚の名前だって、敬一くんの方が知ってるじゃん。仲間にしようよ。いろいろ教えてもらおうよ」

「だけどな、あいつは、家下川に魚がすめないっていうんだぜ」^⑫

大介は、ふっと、口もとをゆるめて、思い出したようにこういった。

「健ちゃんだって、知らなかったじゃん」

（あつ……）

たしかに、大介のいうとおりだった。ほんの少し前まで、ぼくもなにも知らなかったのだ。

しかし、ぼくはまだ、素直に納得することができなかった。^⑬助けを求めるように、夏葉をよこ目でちらりと見た。でも、

そんなぼくを見て夏葉がいった。

「わたしは、なにもいえる立場じゃないわ」

「ねえ、健ちゃん。夏葉のときだって、あれほど嫌がつてたのに、こんなに仲良くなれたじゃん。大丈夫だよ」^⑭

理屈ではわかる。ただ、問題は、ぼくが敬一を好きではないということだ。

（もともと、秀才の敬一と気があうわけなどないし、敬一や博之のグループのやつらが嫌いなんだ。^⑮それに、一番の問題は、敬一は、ぼくや夏葉とちがい大介をばかにしている。うそつきとはやしたてるのは、きまってあいっらなんだ）

「ねえ、健ちゃん」

⑯ を求める大介に、ぼくはこたえた。

「……いいよ。大ちゃんがいいなら。でも、仲間になるかどうかは、敬一の気持ちしただいぜ」

「うん……。そうだ、こうしようよ。とりあえず、敬一くんを、一度、川へ連れていこう。家下川に魚がいるってことを見せてやろう。そうすれば、腹のたつことも、解決するだろ」

「それはいいけど、でもさ、どうやって、敬一を誘う？ あいつ、ひとりじゃ、絶対こないよ。博之とか仲間を連れてくる。少なくとも三人。そういうやつなんだ」

「うん、そこなんだよね。できたら、ひとりがいいんだけど……」

「大ちゃん。それに、あいつ、秘密がまもれないぜ。きつと、みんなにしゃべるよ」

「それも、困るよなあ」

D ぼくたちは、敬一ひとりを川に連れていく方法を、そして、秘密をまもらせる方法を考えた。しかし、いくら考えても、こたえはどうにもみつからなかった。

「はーっ、名案はないかなあ」

「そうだね、また、ぼちぼち考えよう」

E こたえを宿題にしたぼくたちに、夏葉がいった。

①「ところで、キミたちさあ。さつき、なにかいったよねえ」

「なんだっけ？」

「さあ？」

「わたしが仲間に入るときのこと。キミたちわたしのこと、そんなに嫌がっていたわけ？」

「あっ！」

F ぼくたちは、ゆつくりとあかずさり、一気に駆けだした。

「まてーっ！」

必死で逃げる大介の背中に、黒いランドセルがゆれていた。ぼくの背中でも、カタカタとおどっている。あいかわらず肩をしめつけるやつかいものも、なぜだか今は小気味よく感じられた。

G ぼくたちは、校舎のはしまでひとかたまりで走り、そこから先は、散りちりになっていった。

(阿部夏丸『うそつき大ちゃん』による)

*「ウシモツゴ」……コイ目コイ科。岐阜県、愛知県にまたがる濃尾平野のみに分布する淡水魚の一種。

問一、——線①「敬一のやっていることはまぎれもない研究」とありますが、「まぎれもない研究」という理由として最も適切な部分を、次の文の□にあてはまるように、本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

敬一が、
□
しているから。

問二、——線②「こんな自分」とありますが、どのような「自分」のことですか。「自分」に続くように、これより後の本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問三、——線③「口もととは笑っている」とありますが、なぜ「笑っている」のですか。その理由として最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

- (ア) 自分の悩みをどうにかして笑い飛ばしたいと思っているから。
- (イ) たわいもないことに悩んでいる自分をおかしく思っているから。
- (ウ) 自分の嫌な部分をふり返るつらさに負けまいと思っているから。
- (エ) 思いがけず健太に同情されたことを情けなく思っているから。

問四、——線④「夏葉の気持ち」として最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) みんなに誤った情報を伝えた敬一が許せず、彼の悪口を言わずにはいられなくなっている気持ち。

(イ) みんなに注目された敬一の研究発表をねたましく思い、その悪口を言いたくなくなっている気持ち。

(ウ) みんなの期待に^{こた}えるために、「いい子」のふりをする^{こた}ことに疲れて^{つか}つらくなっている気持ち。

(エ) みんなの前で本当の自分を出せずにいた自分に嫌^{いや}気がさし、腹立たしくなっている気持ち。

問五、——線⑤「能天気な調子」とありますが、どのように考えたり行動したりすることですか。それを表している部分を本文中から過不足なくぬき出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問六、——線⑥「背筋をのばして、おどるようになってくる」とありますが、この時の「夏葉」の行動と対照的な気持ちが表れている行動を本文中から一文でぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

問七、⑦にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) 優しい (イ) 明るい (ウ) 真剣^{しんけん}な (エ) 穏^{おだ}やかな

問八、——線⑧「ぼくも、つとめて明るくふるまった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) 夏葉が悩み苦しんでいたことを大介に知られたくなかったから。

(イ) 夏葉がもう一度、敬一のことと怒り出すことが怖^{こわ}かったから。

(ウ) 敬一に感じていた腹立たしさが、だんだんと収^{おさ}まってきたから。

(エ) 敬一のことが嫌^かいだという気持ちを、本当は隠^{かく}したかったから。

問九、——線⑨「それ」が指している内容を、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問十、⑩にあてはまる文として最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) にくたらしい敬一を、大介は、仲間にするというのか？

(イ) にくたらしい敬一に、大介は何を教えようというのか？

(ウ) にくたらしい敬一を、大介は、どう思っているのか？

(エ) にくたらしい敬一に、大介は何をたくらんでいるのか？

問十一、——線⑪「本当のこと」とはここではどのようなことですか。「ということ」に続くように、本文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問十二、——線⑫「大介は、ふっと、口もとをゆるめて、思い出したようにこういった」とありますが、このときの「大介」の気持ちとして最も適切なものを、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

（ア） 最初は自分も知らなかったことを忘れていた健太を非難する気持ち。

（イ） 敬一が家下川のことを何も知らないのを、腹立たしく思う気持ち。

（ウ） 家下川にいる魚たちを敬一に見せることを考えて、わくわくしている気持ち。

（エ） 最初に健太を家下川に連れて行った時のことを懐かしく思う気持ち。

問十三、——線⑬「助けを求めるように」とありますが、「健太」は「夏葉」にどのようなことを言ってもらいたかったのですか。わかりやすく答えなさい。

問十四、——線⑭「理屈ではわかる」とありますが、このときの「理屈」についての具体的な説明として最も適切なものを、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

（ア） 夏葉が仲間に入ることに関して、最初は抵抗があつたが、いい仲間になることができたので、一緒に川遊びをするうちに、大介の良さが敬一にもわかるだろうということ。

（イ） 夏葉が仲間に入ることに関して最初は抵抗があつたので、秀才である敬一が自分たちの仲間になるのは難しいだろうということ。

（ウ） 夏葉が仲間に入ることに関して、最初は抵抗があつたが、いい仲間になることができたので、敬一を入れることは嫌だと思つていても、いつかいい仲間になれるだろうということ。

（エ） 夏葉が仲間に入ることに関して最初は抵抗があつたので、嫌いだと思つている敬一を仲間にするのは抵抗があつて当然だろうということ。

問十五、——線⑮「嫌いなんだ」の主語を答えなさい。

問十六、⑯にあてはまる最も適切な言葉を、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

（ア） 判断 （イ） 答え （ウ） 救い （エ） 同意

問十七、——線⑰「さつき、なにかいったよねえ」とありますが、具体的にはどのような内容を指していますか。その内容を表している一文を本文中からぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

問十八、——線⑱「あいかわらず肩をしめつけるやつかいものも、なぜだか今は小気味よく感じられた」とありますが、「あいかわらず」が直接かかっていく部分はどこですか。次の（ア）～（キ）の中から選び、記号で答えなさい。

（ア） 肩を （イ） しめつける （ウ） やつかいものも （エ） なぜだか
（オ） 今は （カ） 小気味よく （キ） 感じられた

問十九、——線A～Gの「ぼくたち」はそれぞれの場面で異なっています。それらをグループ別にまとめたものとして最も適切なものを、次の(A)～(E)の中から選び、記号で答えなさい。

- (ア) A / B・C・D / E・F / G /
 (イ) A / B・C / D・E / F・G /
 (ウ) A・G / B・C / D・E・F /
 (エ) A・G / B・C・D・E / F /

問二十、この文章を二つの場面に分けた場合、二つ目の場面はどこから始まりますか。その最初の五字を答えなさい。

問二十一、本文の内容として適切でないものを、次の(A)～(オ)の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 敬一は、みんなには内緒^{ないしょ}で研究発表の準備を家族に手伝ってもらっていた。
 (イ) 夏葉は、敬一が行った研究発表を聞き、納得できない気持ちになっていた。
 (ウ) 敬一は、本やパソコンで調べた川の知識は、大介よりも豊富に持っていた。
 (エ) 健太は、敬一の研究発表に対して自分ではとてもできないと感心していた。
 (オ) 大介は、健太と仲良くさせようと思い、敬一を仲間に入れようとしていた。

二、次の①～⑤の言葉が最も適切に使われている文を、次の(A)～(エ)の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「つつしむ」

- (ア) 学校生活では、友人関係をつつしみなさい。 (イ) 熱があるので、外出をつつしんだ。
 (ウ) 将来のために、お金をつつしみなさい。 (エ) 天候不順のため、体育祭をつつしんだ。

②「つぶさに」

- (ア) 彼はその事故の様子をつぶさに調べた。 (イ) 彼は持っているお金をつぶさに差し出した。
 (ウ) 若いときの苦労はつぶさにするべきである。 (エ) 木になっている実をつぶさに採ってしまった。

③「知らぬが仏」

- (ア) 私は最後まで知らぬが仏で押し通した。 (イ) 私は知らぬが仏を決め込んでだまっていた。
 (ウ) あの時は知らぬが仏でのんきだった。 (エ) 祖母は知らぬが仏に手を合わせて拝んだ。

④「うつつをぬかす」

- (ア) 毎日夢のようにうつつをぬかしている。 (イ) 毎日勉強にうつつをぬかしている。
 (ウ) 毎日一生懸命^{いっしょうけんめい}うつつをぬかしている。 (エ) 毎日ゲームにうつつをぬかしている。

⑤「たわわに」

- (ア) 今年は庭の梅の木に実がたわわになった。 (イ) 今年の春は公園の桜がたわわに咲いている。
 (ウ) かごの中には柿の実がたわわに盛ってある。 (エ) 新幹線に帰省客がたわわに乗っている。

三、次の①～⑤の文の——線がついた言葉を、慣用句で置きかえるとすれば、どのような慣用句が適切ですか。置きかえる慣用句として最も適切なものを、あとの(ア)～(ク)の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。また、選んだ慣用句の□にあてはまる適切な漢字を答え、それぞれの慣用句を完成させなさい。

- ① これは、私には解決できない問題だ。
- ② 遠慮する^{えんりよ}必要のない友と語り合うことは、本当に楽しい。
- ③ 会議で彼女の提案に反対した者はいなかった。
- ④ 演技を終えると、その選手は満足しきった表情で観客に手を振った。
- ⑤ お互い^{たが}に打ち解けた話し合いのおかげで問題は解決した。

- | | | | | | |
|-----|---------|-----|--------------------|-----|---------|
| (ア) | □ がきかない | (イ) | 異を □ えた | (ウ) | □ にあまる |
| (エ) | □ がおけない | (オ) | □ の笑み ^え | (カ) | □ を許せない |
| (キ) | □ の喜び | (ク) | ひざを □ えた | | |

四、次の①～⑩の——線をつけたカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- | | |
|-----------------------------------|--------------------|
| ① 水害のフツキュウ作業に協力した。 | ② セツソウのない若者が増えた。 |
| ③ 父はショウケン会社で働いている。 | ④ キリツ正しい生活を送っている。 |
| ⑤ 犬は飼い主にチュウジツな動物だ。 | ⑥ この雑誌にはフロクがついていた。 |
| ⑦ 大雪で道路がスندگانされた。 | ⑧ 潮の干満は月と関係がある。 |
| ⑨ 列車の運行の妨害 ^{ぼうがい} を画策した。 | ⑩ 彼らは異口同音に反対した。 |

